茶の利用についての研究ノート（1）

小 竹 志 織

目次

１．はじめに
２．かつての茶の栽培地を探る
３．おわりに

― 論 文 要 旨 ―

私たち日本人にとって日常的に飲む身近な飲料と言えば煎茶・ほうじ茶・番茶などであろうか。紅茶やウーロン茶も、ここ数十年で当たり前のお茶となっている。どの茶も同じ植物から作られるが、そもそも「茶」の利用はどのように始まったのか。茶樹の原産地や日本での起源については諸説があるが、様々な状況から中国大陸から何らかの形で渡来したものであるとされている。

本稿では日本における茶の歴史を概観し、日本の茶栽培のながれを確認した。また、現在、山中などでみられる茶の樹の様相を解明するため、かつての茶の栽培地を調べる試みをした。今回は米原市旧伊吹町の藤川・吉槻・甲津原において、現地での聴き取り調査を実施できた。藤川では伊吹町史にみられた「藤川茶」の名称については確認できなかったが、かつての茶畑のことや、集落のあちこちに茶樹がみられ、今も自家用に活用されていることがわかった。甲津原では町史の記述どおり、茶の樹はなく、なぜ茶をつくってないかは解明できなかったが、代替茶のことを調査できた。吉槻については江戸時代の状況までたどることはできなかったが、集落のあちこちに茶樹がみられ、集約的な茶畑の様相ではなかったが、自家用などに土留めや垣根を兼ねて生育している様子がみられた。

今回の調査結果は上記の２例の報告になる。

キーワード
茶　栽培　藤川　吉槻　甲津原　バイ（チャボガヤ）